

最強組織の法則・レジュメ 3、4部

教育システム工学 2 回生
太田 圭亮

第三部

第九章 自己マスタリー

自己マスタリーは能力と技術に基礎をおいているが、心の成長を必要とする。

自分にとって何が大切かを常に明らかにする。 創造的な視点で生きる
現実をどのように把握するかを明らかにする。

自己マスタリーは個人に高い徳を目指させ、仕事の充実に必要であると同時に、優れた会社を作るためにも必要。

- ・ビジョン：一つの目的地。具象。よいアイデア、ではなく強く望んでいるもの。
- ・目的意識：一種の方向性。抽象。一つの目的を遂げた後個人を引っ張るのは目的意識。

ビジョンと現状の差が「クリエイティブ・テンション」(創造的な緊張関係)を生み出す。

創造的なエネルギーの元であり、この維持方法を学ぶことが自己マスタリーには大切。
= 自分のビジョン、そして真実にこだわるのが大切。

だが 自己マスタリー導入に抵抗がある。
ソフト面なので生産性と純利益への寄与がわかりにくい。
悲観主義の人は自己マスタリーを信じられない。
自己マスタリーによって組織の秩序が乱されるのでは、という不安。

第十章 メンタルモデルの克服

メンタルモデルとは、複雑な世界の仕組みに対しての自分の秘められた考えである。
人の行動に強い影響力を及ぼすが、意識下にある。

無意識のうちに行動が縛られている場合がある。

メンタルモデルのディシプリン
何が支配的な前提となっているかを見つける。
面と向かった話し相手から学習する技術を身につける。

世界の見取り図を作り、検証、改善が可能になる。 L.O.への突破口となる。

組織のメンタルモデルの管理
リーダーは常に自分のメンタルモデルを向上させる。
他人への押しつけは意味がない。個々に真実を探求し個人のメンタルモデルを保つ必要がある。

組織のメンタルモデルにおけるゴールは合意や調和ではない。
しかし吟味や検討は必要 = 真実へのこだわり。

問題：いくつかの情報を抽象化し、事実として無意識に受け入れてしまうことがある。
対処：自分が信じているものに疑問を呈す。

メンタルモデルにはシステム思考が必要 メンタルモデルの向上 + 思考の筋道のシフトが望める

第十一章 共有ビジョン

共有ビジョン：組織のあらゆる人が抱いている心象

- ・社員と会社の関係を変化させる。
- ・目標への牽引力が強くなり、新しい行動や考え方が生まれる。

共有ビジョンを築くために
まず個人的ビジョンを奨励する 組織内でのあらゆる人々の個人的ビジョンと結びついて「共有ビジョン」となる。

多数のビジョンの共存を認める。

共有ビジョンにもシステム思考が必要 自分の未来は自分で作ると信じなければ
ビジョンは無駄に終わる

第十二章 チーム学習

チーム学習に重要な三点
問題を深い洞察力でとらえること。何人も集まると一人よりも遙かに理解力が高まる。
革新的に、そして調和しての行動の必要性。
チームのメンバーが他のチームで果たす役割。

チーム学習のディシプリン
・意見交換：お互いの意見を出してそれを様々な角度から検討 新しい意見を見つける
・ディスカッション：様々な意見を出して、答えを出す 全体の分析に役立つ
しかし 妨げる要因も存在する = 「防衛慣例」(意見の言いにくい体制。例：ワンマン社長)

チーム学習にはシステム思考を用いた言葉でないと対応できない。(日常の言葉では見通しが短い)

第四部

第十三章 組織の「分権化」

L.O.にはますますの分権化が予想される。

分権化にあたって ・個々のビジョンが組み込まれていなければならない。

・分権化を本当に望む。結果に責任を持つ。

分権化後の質の管理
・共有ビジョンの認識
・自己マスタリーとチーム学習
・システム思考

危険性もはらんでいる = 「共同食卓」の危険性(例：お互いの顧客の取り合い)
寛大さの必要性(失敗をして和解することで成長が見られる)

第十五章 仕事と家庭の対立

昔 ・「出世のために家庭を犠牲に」 = 仕事と家庭、二つの世界、二つの価値観で生活していた。

不均衡の存在(= 仕事をやればやるほど仕事に傾く 家庭がよりおろそかに・・・)

今 ・今までの構造から抜け出し、自分に必要な選択、行動を。
L.O.のリーダー育成 親としてうまくいかない仕事漬けの人が
リーダー育成ができるわけがない

家庭内の子育て

(逆に言うとも)
仕事と家庭は両立可能、両立は必要である
(L.O.には個人のすべての面における成長の義務あり)

L.O.の五つのディシプリンは会社にも家庭を育てるのにも役に立つ。

以上から、仕事と家庭に等しい価値をおけ、好循環が生まれる。

二つの基準を持つ人から、一人の人間へ
問題提起：真実を見るためとはいえ、自分の前提への疑問をあまりにも行いすぎると懐疑論者のようにはなりはしないか。必要な未来予測にはどう対処すればよいのか。

